

資料室だより 82

旧刊案内

Anguish of Hell and Peace of Soul: A 1623 Collection of 16 Motets on Psalm 116 by M.Praetorius, H.Schütz and others (Harvard Publications in music,18) c1994

(請求番号 MC1a/A594/1)

[地獄の苦悩と魂の平安]というこの不思議なタイトルを持つ曲集は、1623年の復活祭にドイツのイエーナで Grossmann という人物によって編纂され、刊行された。第二次世界大戦のドイツをくぐりぬけ、かろうじてクラクフにパート譜が1セット完全な形で残されており、それをバハ学者としても名高い Christoph Wolff が校訂してハーヴァードから出版したものである。これはルター訳ドイツ語聖書による詩編 116 番を 16 人の作曲家に作曲を依頼した、ひとつのモニュメントとも言うべき曲集なのである。

この Grossmann という人物については、私が調べた限りの音楽辞典では Riemann Musik Lexikon でしか名前を見ることができない。彼はイエーナ大学で法律を学び、行政官として成功を収めたようであるが個人的にラテン語、音楽も学んでおり、文学、音楽に造詣が深い裕福な教養人だったようである。彼は 1616 年に命を脅かされるような経験(おそらく病気)をしたらしい。そこから救われた感謝を詩編 116 に託し、その年代にあやかって 16 人の友人、知人である作曲家に作曲を依頼したのである。

その 16 人とは Schein, Franck, Praetorius, Schütz など。この顔ぶれの豪華さを見ると、ここに 17 世紀初頭のルター派教会音楽の傑出した人物が出揃った感があり、Grossmann の音楽界における大きな影響力が伺える。同時代のドイツという共通項はあるものの、出身地、背景、受けた教育も才能も異なる 16 人の作曲家が同一のテキストをいかに扱ったか、様式、和声やリズムの選択、表現の工夫、レトリカルな配慮はどうかされたか、その時代のドイツ宗教音楽の一段面を示してくれる興味深い曲集ではないだろうか。もちろん研究用のみならず、すぐれた実用版としても使えるものである。

巻末にドイツ語訳詩編 116 (現代語スペリングに直してある) と英語聖書 (キング・ジェームズ版) との対訳がある。

杉本ゆり記